

画仙紙の技術革新 Technological Innovation of Gasenshi (Calligraphic Paper)

稲葉 政満*・加藤 雅人**

INABA Masamitsu*・KATO Masato**

和紙・手漉き・機械漉き・製紙技術・伝統技術

Washi (Japanese paper)・hand-made・machine-made・papermaking technology・traditional technology

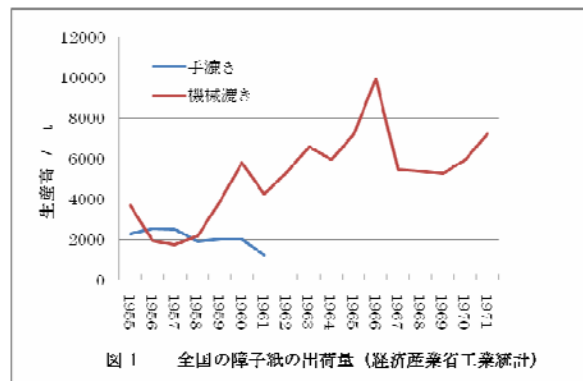
要旨

戦後の紙の需要変化に対して、因州（鳥取）と西島（山梨）は画仙紙への転換により産地の生き残りを計った。ユーザーの要望に沿った紙を作ることで30年近く安定した生産を行ってきた。それまでの伝統技術からどのようにして転換に成功したかについて述べる。

因州

現在因州（鳥取県）では佐治と青谷地区で紙漉きが行われている。青谷では薄手の事務用紙（三椏、1945年から1955年頃までのコクヨの罫紙全部）を中心に売り上げていたが、複写機の普及により需要がなくなった。1950年代後半に開発された懸垂式短網抄紙機により機械漉きの障子紙が急激に市場へ進出する一方、新築家屋の洋風化もあり手漉きの障子紙も売れなくなっていった。経済産業省の工業統計調査の障子紙の出荷量を図1に示す。機械漉き製品の出荷量が1959年から増加するのに対して、1961年には手漉き製品はさらに出荷量が落ち込み、翌年には手漉き和紙としてひとまとめにされて、工業統計から姿を消している。

そこで、1957年頃より因州では書道用紙への切り替えを試みた。青谷地区においては、画仙紙は1952（昭和27）年にその第1号が抄紙された¹⁾。しかし、手漉きの障子紙からの転換では、当初製品寸法のみを画仙紙サイズにしたのみであり、まさに障子紙のようだと、消費地の紙問屋から相手にされなかった。幸いなことに書道家の中には新しい表現のために変わった紙を試す習慣があり、少しは売れた。そこでユーザーの要求を聞き、「ホンワカとにじむ紙」として未晒の楮パルプに次亜塩素酸で軽く漂白したサルファイトパルプ（当初はクラフトパルプ）を配合して成功した（楮画仙



紙：かな用)。「因州筆切れず」との評価を得ていた三椏半紙の伝統からは漢字用画仙紙が作られた。一方、佐治村では稲わらや三椏故紙を配合した漢字用画仙紙を開発した²⁾。画仙紙に必要な機能としては墨の発色、特に交差した箇所黒味、かすれの美、そしてにじみの美がある。さらに画仙紙の伝統がなかったことから自由な発想が生まれ、様々な原料からの画仙紙を積極的に開発した。現在、全国で120種くらいの非木材繊維が和紙に用いられているが、そのうち1/3位は因州で使っている。たとえば生姜などの使用である。そして、産地問屋が全国を自分で営業に廻る慣習を生かして、直接小売店への売り込みを積極的に行った。この商品開発と独自の販売ルートの開拓、書道家との結び付きにより1961年頃には因州ではその出荷量の7割以上が画仙紙を漉くようになった。

* 東京芸術大学大学院美術研究科 教授

** 東京文化財研究所 保存修復科学センター 研究員

* Tokyo University of the Arts, Professor

** National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo, Researcher

1967年頃からは東京で毎年、見本市を行った。当初は商品のうち書道用紙の割合が60-70%程度であったが、5回目位からはほとんど書道用紙となり、10数回行った。さらに名古屋でも開催した。見本市では、試し書きをしてもらうことにより販売量を飛躍的に伸ばすことに成功した。因州ブランドは1973年頃には確立し、販売量も1989年頃まで増加したが、それ以降は低下してきており、新たな商品開発が求められている。個別には売れているものが出てきているが、産地全体を潤すほどのものはまだ見いだせていないのが現状である。

西島

竹田悦堂³⁾は1946年に復員してすぐに書道塾をはじめ、必要な紙を山梨県の市川大門に求めた。当初の用紙の入手が軌道に乗った頃に紙にトラブルが起き、1951(昭和26)年に西島のノ瀬憲(丹頂紙業)と佐野喜代亀が協力して半紙と画仙紙の開発をした、その後もユーザーの要望に合った紙に挑戦して一大産地となった。特に、1955年東京都美術館が改築して、蛍光灯照明、グレーの壁面となり、これに西島画仙紙の発墨、青墨に適したことが寄与した。西島和紙の特徴は事務用紙の三桎故紙をうまく利用したことにより、短い繊維で薄い紙を作る技術にもたけている。

画仙紙の販売量をささえた社会的状況 学校書道

書道は1948(昭和23)年に小学校から排除された。それが1951(昭和26)年度から小学校、1952(昭和27)年度から中学校において、国語「書写」の名で正課に復活した⁴⁾。

画仙紙は書道用紙としては高級品であり、学校書道では低級品を用いるので、そこでは直接画仙紙の消費があるわけではないが、書道用紙の一定の需要をもたらした。そして書道塾に通う子供も多かった。これは書道塾を経営する書道家を支えた。最近では学習指導要領では書写を行うことになっているにもかかわらず、その実施状況が低下の傾向にある。東京都の調査では平成17年度公立中学校では636校中66校が毛筆の未実施があったと報告している⁵⁾。さらに児童・生徒数が減少しており、習字用品全体の売り上げが低下している。

書道団体

戦後の1946(昭和21)年に日本書道美術院が設立されるが、翌年には脱退者が相次いで新しい書道会が次々と設立された。1948(昭和23)年にこれらの書道会を横断する組織として毎日書道会が設立され、第1回全国書道展が開催された。これは1951(昭和26)年から「毎日書道展」として毎年開催されている。一方、昭和23年(1948年)に日展に「5科(書)」が新設され、両者を中心にして書道が発展していくことになる⁶⁾。

ちなみに毎日書道展の公募点数は

第21回展(1969年)	5,674点
第22回展(1970年)	6,220点
第23回展(1971年)	6,907点
第25回展(1973年)	10,293点
第28回展(1976年)	13,487点
第30回展(1978年)	15,924点
第32回展(1980年)	17,607点
第35回展(1983年)	21,146点
第48回展(1996年)	30,009点

と発展しており、確実に書道人口が増えていることがわかる。そして、これらの団体の主要メンバーの要望により紙を開発することで、まとまった量の紙が売れることになる。

輸入紙

画仙紙はもともと中国からはいつてきた紙であり、現在でも中国産の宣紙(紅星牌:コウセイハイ)が最高の紙として用いられている。以前は中国との直接取引ができず、紅星牌の市価は100枚当たり15,000円から40,000円であった。このため、国内で同様の性能を有した紙の開発が盛んに行われた。しかし、現在では紅星牌の価格6,000円以下となり、さらに台湾資本により台湾、中国本土、フィリピンなどで作られた日本画仙紙類似の紙が安価に、しかも大量に輸入されるようになり、輸入紙の使用割合は1998年当時でおおよそ7割にまでなっている⁷⁾。

図2に山梨県と鳥取県の書道用紙と障子紙の出荷量の統計を示す。画仙紙の統計はなく、数量ベースであるので、低級な用紙の動向が主であるが、両産地での売上の状況が見えている。



写真1 西島のセイコー式手漉き装置



写真2 因州の半自動式手漉き装置

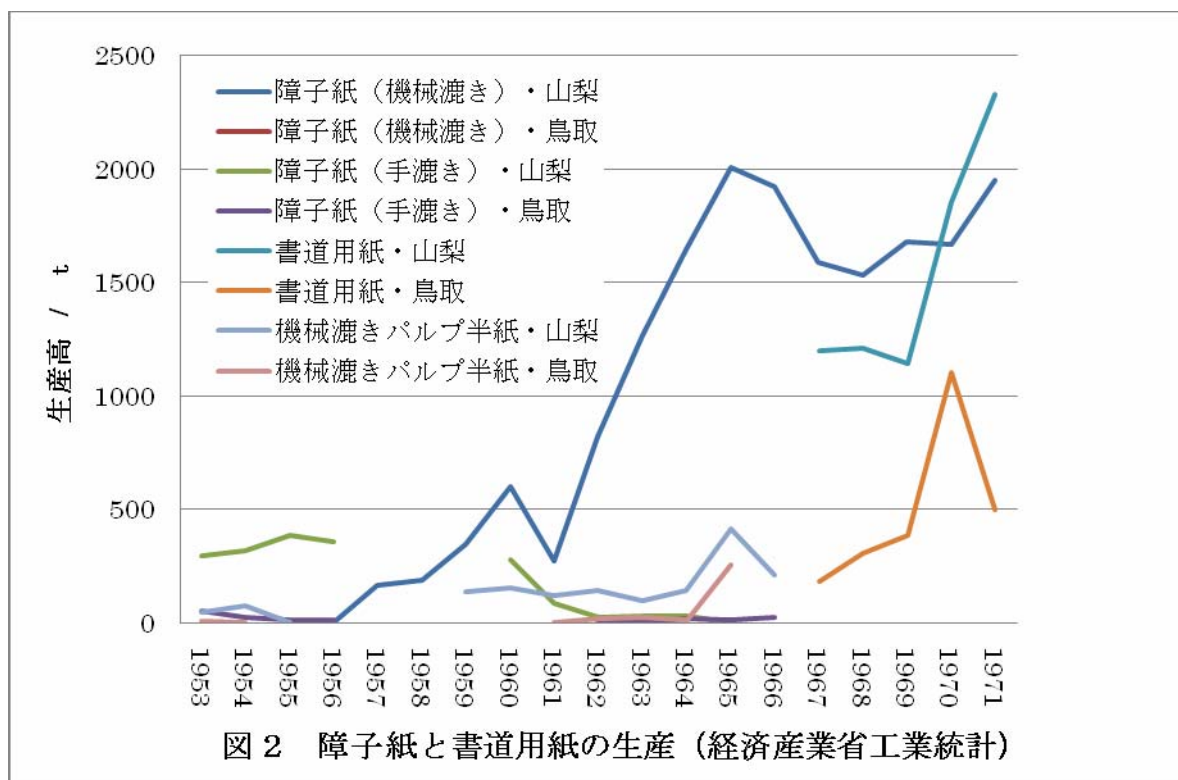


図2 障子紙と書道用紙の生産（経済産業省工業統計）

技術革新への取組

西島と因州で特徴的なのが、手漉き工程の省力化のために流動式の手漉き装置の開発と導入が盛んなことである。これは、画仙紙の場合、紙が薄く一度の組み込みで紙層を形成することが可能なことと、繊維長の短いものを主として使うためと考えられる。西島ではセイコー式（写真1）、因州では半自動式（写真2）そして、紙床（湿紙を伏せるところ）への移行などまで自動化した機械（大野—松木園式）などが開発されている。これは省力化に寄与しており、韓国、台湾、フィリッピンなどでも使われている。これらの詳細に関しては別途報告予定である。

注

- 1) 熊澤武司：鳥取手抄和紙同業界・佐治地区、季刊和紙、16、14（1998）
- 2) 因州和紙の歴史、季刊和紙、16、13（1998）
- 3) 竹田悦堂：西島雅仙発生 その経緯・研究・開発、季刊和紙、16、6-7（1998）
- 4) フェキの歴史(昭和戦後)
http://www.fueki.co.jp/20_histry/histry_s_a.html
- 5) 東京都教育委員会指導部：公立小・中学校国語科書写（毛筆・硬筆）実施状況調査結果（2007.1）
<http://www.metro.tokyo.jp/INET/CHOUSA/2007/01/DATA/60h1p200.pdf>
- 6) 毎日書道会小史（毎日書道会）
<http://www.mainichishodo.org/index.php>
- 7) 座談会「西島の和紙づくり」、季刊和紙、16、8-11（1998）